

リベルテール



Libertaire Vol., VIII. No. 7

無政府主義誌

昭和52年9月15日発行第3種郵便物特認可
リベルテール定価一〇〇円(郵便料共)

人類更生の大道アナキズム研究書

何が私をこうさせたか 金子ふみ子獄中手記決定版	2,400円
金子ふみ子歌集 解説:瀬戸内晴美	500円
権藤成卿著作集2 農村自救論・日本農制史談	3,000円
大杉栄秘録<増補> 堀保子ほか19氏著	1,000円
無政府主義論 エンリコ・マラテスタ著	300円
ディナミック 石川三四郎個人紙復刻版	3,000円
アナキスト革命 ジョージ・バレット著	150円
西洋社会主義運動史 石川三四郎著	1,000円
ロシア革命の批判 A・ベルクマン著	200円
黒色青年 黒色青年連盟機関紙 大正15年創刊号より昭和6年終刊号まで復刻	2,500円
黒色戦線 アナキズム文芸思想誌 第1次 昭和4年創刊号より終刊号まで復刻	5,000円
労働運動 第5次 昭和2年復刊号より終刊号復刻 <近刊> 差別とアナキズム/水平社とアナ・ホル抗争史	
宮崎晃著	1,600円
権藤成卿著作集3 君民共治論	3,000円
マラテスタ著作集1 無支配への道	300円
アナキズムのABC ベルクマン著	100円
石川三四郎選集1 古事記神話の新研究 <解説・石川三四郎論 大沢正道>	2,200円

〒372 群馬県伊勢崎市中町和田 電 0270-24-0776
郵便振替口座 宇都宮 11015 黒色戦線社 大島英三郎
東京事務所 電 03-735-1246
〒144 東京都大田区西蒲田 7丁目61番8号エンリコビル4階
国鉄蒲田駅西口下車、蒲田銀座アーケード街歩いて5分突き当り左隣、毎月第2・第4日曜午後1時より4時共学読書会、初心者に公開

販売書店/〈東京〉神田ウニタ・新宿模索舎・吉祥寺ウニタ・早稲田文献堂〈京都〉中区寺町二条上・三月書房

- リベルテール Libertaire
- 1977年 6 月15日発行 Vol., VIII No. 7
- 編集兼発行者 三浦精一
- 発行所 東京都練馬区大泉学園町2190 萩原晋太郎方 リベルテールの会

目次	
「アナキー」に向って進め	1
中国無政府主義試論 (3)	
1. 劉師復	
「資料1」についての補足的記述	
二人の場合	2
志摩達夫	
一波万波	7
大山勇一	
水沼浩さん／吉野さん／ひろせ・しんじさんより	10
海外だより	13
野火	16

表紙絵はT君の投稿。「状況」77です。

財産者 財産は 盗品だ 盗人だ
 財産所有主 財産家
 盗賊也 盗賊也

劉師復 (Liu Shi Fu 一八八四—一九一五年)

アナキーに向って進め

経験から話そう。6月のある夕方、外は雨だった。信用金庫の建物の5階で、印刷業者の会合があり、十
 八名程の中年と老年の男達が集った。型通りの各部の報告を受け、なんでもこんなに役員ばかり多いのか、肩
 書きの人ばかりが発言する。それはそれでいいのだが、あらかじめ同意を取付けていたらしいのに当方では
 初耳の「韓国旅行」の件が話出され、賛否を取ると言う。その内容は妓生旅行ではないが、何んでも今度、
 事業所ができ、日本からタイプと写植の機械を輸入して集中的に仕事をするようになったので、そこへ発注
 して仕事をして貰う為の下見見学旅行なのだそう。清打ちの製版代がそこだとB5版一頁(週刊紙大)、
 二五〇円だそう。既に九州の業者や東京のある出版社は発注して居り、それをこれからやろうというので
 ある。それは他の業界—製縫業や魚のすり身—もうやって居る事だし、韓国では現在活版業が一般だが、行
 くゆくはゴールド化(タイプオフセット、写植オフセット印刷)に切替えた、その技術習得の為に日本
 の業者と提携したいとのことであつた。私は一種名状しがたいいらだたしさを覚え、発言した。要旨は、技
 術習得なら他にも技術交流の方法があるだろう。韓国が学びたいというなら、それは結構である。しかし、
 日韓ゆ着が問題にされているこの時期に、何故旅行をするのか、まして一頁二五〇円という下請け値段は国
 内のわれわれの値段の三分の一である。韓国人の生活水準がわれわれのより低いからと言って、それが当然
 な値段とするのは納得できない。もし発注するなら諸掛りを考えても五〇〇円なり六〇〇円にしたらどうだ。
 それが出来ないというなら、明らかに経済搾取だ。出席者は「経済搾取」という言葉で動揺した。満州か
 ら裸一貫で帰ってきて、現在印刷会社の社長になっている人は「国内でもお互い、値段で足を引っ張る者が
 いる。それで仕入れは安い方へ頼んでいるのだから、韓国が安ければそちらへお願いしていいではないか?」
 「ならば安ければ何をやっていいのですか?」「それはその……」出席者の大方の意見はそこまで深刻に
 考えなくても、正論は正論として、要するに気楽に見学して来ようではないかと言うのが多く、表決は13対
 4で実行することになった。そうだ諸君、日韓ゆ着や韓国旅行の是非は、ジャーナリズムの紙の中だけで
 はなく、いっどこでさみやくばくの問題になるか判らない。そしてその時は「正論だ」と敬遠されようとも、
 悪魔の顔を見据えるように、相手をみようじゃないか、得てして悪魔は初めはおどろおどろしく、やがて
 親しみやすく、遂には抱くようになるかも知れないが、その時は叫ぼうではないか、アナキーに向って進
 め、キリスト教徒の八悪魔よ、去れ、Vと同じ効果がある筈である。

(はしもと・記)

中国無政府主義試論 (3)

1. 劉師復

「資料1」についての補足的記述

師復の生まれた一八八〇年代から一九一〇年代頃の中国は、世界史の中でもっとも変動の激しかった時代と言えよう。その主な理由は、二六〇年に亘る清朝の体制的頹廢と崩壊が国内の要因であったが、外圧としては、西欧の第一次産業革命がもたらした、中国における市場・販路の獲得競争（帝国主義的侵略）が活発化し、それに伴い国内の体制維持に充足していたと思われる思想の基盤が、科学技術とその論理によって、揺がされたのであった。五千年の歴史をもつ一つの文明の系が、別の文明の系に触れた際に引起す猛烈な動と：反動の運動は、われわれの近代史でも経験していることである。その主要な反応の仕方は、これを排撃する^{*1}か取込むか、排撃しつつ取込むか、または新規の概念を既知の概念に照合しつつなじんで行く^{*2}というような、これもパターン化した挙動を示すようである。これが東方における西欧文明の受容の仕方であり、現われとしては民族主義の興隆となり、中国の場合は、その中に種族革命（当時実権を掌握して

いた満州族に対する漢族の反抗と奪権闘争）が二重映しになり、結果は種族革命の成功が即近代国家の体制創出へとつながり、またこの国家体制の選択にあたって、イデオロギーとしての資本制か共産制かの闘争へと発展して、今日では一応共産制の国家体制によって終息したかのように見える。しかしその経過の中では幾つかの選択枝が用意されていたのであって、民衆の希望と理想、その達成のための闘争史は、いつの時代、どこの国でも公的史書の提出するものとは異なるのだが、中国近代もその例外ではない。

*1 一八四〇年代「アヘン戦争」から一八九四年「甲午之戦」の間に西洋の空気に触れ伝統思想が動揺したが、頑固派と呼ばれる人びとは、清朝擁護を軸として西洋に反対した。義和団事件（一八九九年）はもと農民蜂起で（反清復明）を呼号したが清朝の圧迫と同情者を得るため「扶清滅洋」になり六ヶ国連合軍に鎮圧され、かえって清朝の崩壊を早めた。

*2 清朝政府の高級官吏であった曾國藩、李鴻章等は洋務派と呼ばれ、各種の産業（輪船公司、電報局、鉱務局、鉄道）を興し、中国の自強策をすゝめたが、官僚の腐敗化と外圧に抗しきれなかった。

（一八八〇年代）その中で康有為の孔子を再評価した「改制」の提案と維新運動（一八九七年）が起き文明の受容態度としては、「中体洋用」（張之洞の言葉で「和魂洋才」に似た発想。）が唱道された。これにつきアナーキストの景梅九が次のように批判している。

「……その頃（一九〇一年明治三四年頃）中国の学問を体とし、西洋の学を用とする邪説が頭にしみこんで、なかなか抜けきれなかった。そこで諸子百家を渉し、その精華を採り、釜のようなものをつくり、それらの新しい学説をまぜようと準備した。日が経つにつれ、ようやく東も西も心理は同じで、中（中国学）を体とし、洋を用とすることはできず、また洋を体とし中を用とすることもできない。つまり中には中の体、中の用があり、洋には洋の体、洋の用があり、つまり中の体と洋の体は同じようなもので、中の用も洋の用も同じようなものだとかかった。」（「留日回顧」大高巖・波多野太郎訳、平凡社刊。）

*3 クロポトキンの相互扶助論に理解を示した蔡元培（一八六七—一九四〇年）は西方文化の吸収につき「人類の消化作用は物質界だけでなく精神界に

も存在する。個人だけでなく民族もまた同じだ。ギリシア民族はエジプト、フェニキア等古代諸国の文明を消化したし、高地ゲルマン諸族はギリシア、アラビア文明を消化した。これが今日の欧州諸国の文明である。わが国（中国）の古代文明は、バビロンにその源を発しているというが実証されてはいない。漢以後アラビア、古ローマの文物が少しは輸入されたが影響は大きくなかった。顕著なのは印度文明である。漢時代は接触（印度文明と）の時代で、晋から唐にかけてその吸収時代、宋は消化の時代であった。わが民族の哲学、文学、美術はこれによって異彩を放っている。元からは欧州文明と接触したが、六〇〇年にしてまだ多くを吸収したとはいえない。例えば球根植物か冬眠動物のようなもので、（その間中は）自分の貯えたものを消費して日々やせ細るようだった。」（出典・蔡元培政治思想 李若一著 65頁。）

これに対し彼は46才の折（民国元年・一九一二年）教育総長として発表した教育方針の中で、公民道德の綱領として、フランス革命の標語をあげ、古義に照合させている。「古義を用いて証明すれば、自由とは富貴に淫せず、貧賤に溺れず、武威に屈しな

いVということだ。平等とはA己の欲しない所を人に施すなVであり、古人の言う恕（寛容）だ。友愛とはA己の欲するものは（人だつて欲するのだから）人に先づやつて貰い、己が達成したいものも先づ人に達成して貰うことVだ。これを古人は仁（ジイ）と言っている¹。

ここでは新規な概念を既知の概念により説明し受容しやすくしているが、その際変容は免れまい。つまり民衆の理念としての自由、平等、友愛が士大夫（知識人）としての第三階級（ブルジョワジー）の理念に変質されたのである。

*4 現在毛沢東選集第五巻に関連して、A自力更生と洋為中用Vが人民の日報^{4/22}日号にでてゐる。外国に学び西洋の学問技術を中国に用立てるものは自力更生と矛盾しない⁵という論旨である。

* * * * *

資料に沿つて補足をつづけると、師復は香山県の人である。これは現在の中山県だそうで、当時の革命者達、洪秀全、孫文、康有為、その他この県出身者が多い。理由は広東省がアヘン戦争の賠償につき曾國藩により収奪されたのとその8年後（一八五〇年）に太平天国の乱が

起きたのでも判るように、苛酷な農村破壊の進行と資本主義的商品の流入による家内商工業の破壊に起因している。彼が農家出か商工家出であるかの判定は資料からつかないが、科挙の準備試験である童子試（一四才以上一六才までとされたが四〇才過ぎでも受ける人があつたのはA科挙V中公新書に詳しい）を受けたのからみて、貧農や日稼ぎ人の子でなかつたと推定される。また彼が八股文を嫌つたのは、当時科挙の話題がここからとられ、繁文の見本のようなもので、新時代に合わないといふからでもあるが、それを拒否するのはとりもなおさず、体制（清朝）側に就くの拒否することであり、彼の反逆精神が読みとれる。この点景梅九も同じで、西学として数学を重視し、日本への留学（師復は一九〇四年梅九は一九〇三年）が前後しているのは興味深い。

さて孫文（一八六六—一九二五年）にとつて、革命運動の拠点はA壇香山と横浜Vであつた。前者は彼の出生地で、ここに十余人程で興中会を創出（一八八五年）したのは彼の兄が牛千数百頭をもつ牧場主であり、友人達も小工商人であつたからだ。孫文は農家の出身で、広州でキリスト教宣教師（米人）につき英語を学び、広東省城で医学を学び、香港の大学に転学卒業して、アモイで医局を開業したこともあるが、漸次、排滿光復の事業に

打込むようになった。挙兵と亡命を繰返すなかで、日本では犬養木堂の密命を受け行動していた宮崎滔天と出逢い、変名の中山を号にしたのは有名である。またこの頃（一八九八—一九九年）の孫文の共和制観はA地方の名望家をそれぞれ立てて、一部の雄に据え、これを中央政府で統御するV（三十三之夢・興中会主領孫逸仙—滔天全集¹）とある。

中国が留学生を日本に派遣するようになったのは、康有為等の改革案の影響だが、一八九八年の十一月から公的に始つた。これは一八九四年（明治二十七年）の日清戦争以来、中国人の日本近代化の見なおしによるものだが政府側の意図とは裏腹に、革命分子と知識人の溜り場になった。⁶一九〇五年孫文は欧州廻遊の途次、東京に立ち寄り中国同盟会を組織した。それまでA乱臣賊子V/A大逆無道Vと攻撃されていた孫文の革命運動（惠州事件を始め各地の蜂起の失敗）が義和団事件の処理後（康有為の変法も西太后派によつて潰され、彼は梁啓超と前後して日本へ遁れ、それでも保皇会A扶清、君主立憲制擁護Vを作るなど）若い留学生、知識人の間に受入れられる素地が出来たのだつた。加盟者はA東京で数百人、中国十七省からの留学生で加盟しなかつたのは甘肅省の出身だけだが、ここは留学生を派遣していなかつたVだと言わ

れている。宣言では「韃虜（満州）を駆除し、中華を恢復し、民国を建立し、地権を平等に」というのであつた。また「前代の革命は英雄革命であつたが、今日のは国民革命だ」として、自由、平等、博愛を唱え、A石敬瑭、呉三桂の所業をする者は天下と共にこれを撃つV/Aみづから帝制を作る者は、天下と共にこれを撃つV/A權力を壟断して、国民の生命を制する者は、衆と共にこれを撃つVとした。師復が入会したのはこの同盟会であつて、日本へ留学していた中国人学生は板垣退助が領導した「自由民権運動」を知悉していたから、幾分その気迫が感じられる。しかも炸裂弾事件は、中国伝統の革命的気分と露国のテロリズムの実際とが混合したものであつて、わが自由民権運動の壮士達とも気脈の通じあうものであつた。蔡元培に語らせると次のようになる。

「革命で流血のないものは未だない。革命をせずして悪政府の奴隷となるのなら、生きてゐるとはいえ、死んでも同じである。故にこの為には流血をはかつてはならない。例えば、一七八九年のフランス革命、中国数年来の革命では、事前に運動者が拘留され殺された者が若干人、時に奮闘して死傷した者が若干人あるが、これは皆己を捨てて民衆に尽したのである。」彼は暗殺が革命の最も簡単な手段だとして、刺客が秦王を刺した例と、ソ

フィアがアレキサンダー二世を暗殺した例をあげている。つまり「弔民伐罪」(悪者を罰して民衆を慰める)「^{シエ}舍己^{チウイチュン}為群」(己を捨てて民衆に尽す)が当時の革命家達の気分であり、師復は多分にこの氣質をもち、その発露が暴発事件になったのである。彼は孫文の革命思想を知り運動に参加することから、革命者の道を歩みだしているが、それは丁度、自由民権運動の周辺から革命者の道を歩みだした幸徳秋水と時代は前後するが平行している。偶然の符合というより、両者の育った時代思潮と民衆運動のなせる業であり、いづれも最初の自覚的無政府主義者になったのが共通している。(この項つづく)

*5 アヘン戦争の賠償金は二一、〇〇〇、〇〇〇元で、その徴収のため広州の農民が苦しみ、太平天国の乱を起すと、曾國藩はこれを「土匪」と呼び徹底的に弾圧した。

*6 一九〇五年詔勅により科挙の制度が廃止され功名出世の途がとざされ、士大夫志望者が政府の奨励の下で留学に進路を求めた。日本留学は近距離なのと言語の近親性、翻訳による欧米文化の吸収の容易さが受け、留学生は上海から汽船で渡航した。文献によれば、一八九六年から始まり、毎年増加して

一八九九年は百余人、一九〇二年六百余人、一九〇三年一千三百余人、一九〇四年三千人以上、一九〇六年八千人以上とある。内訳は官費生(主として軍官学校生徒)私費生、郷・県からの選拔生等であつたが、やがて新思想、新知識者として各種の誌・紙を発行し、激発されて「反清」革命運動に従うようになった。驚いた清朝政府は日本に働きかけ一九〇五年には「取締規則」ができ、これと日本人の侮辱に抗して陳天華(一八七五—一九〇五年)は大森海岸で抗議の自殺をした。師復の帰国は「孫文に従つて」とあるが、この事件に衝撃を受けたものと推定される。帰国組には「秋風秋雨愁殺人」の辞世を残して革命運動で処刑(一九〇七年)された秋瑾女士がいるが、景梅九は残留組に入っている。

この項「清末留日学生」黄福慶著
「留日回顧」景梅九著を参照

五月号の七頁に私が編集陣の一日になったかのごとき「告」がありますが、これは、自由発意と自由合意にもとづく編集陣との協働という意味ですので、念のため申しそえておきます。

(S A K・J U N)